

演題「サル社会における親子関係」



大分市観光協会 小 野 幸 利 先生

■プロフィール

- 1945年（昭和20年）大分県国見町生まれ
- 県立芸短大付属緑ヶ丘高校から明治大学法学部へ進学
- 昭和42年大分市観光協会に入職し、野生ザルの調査及び観光客のガイドなどを担当し現在に至る
- 日本猿の研究も長く、講演の要請も多い 『高崎山のサル社会』を「アドバンス大分」誌に連載

■講演要旨

野生のニホンザルの社会では、オスザルの子供は普通5～6才頃までには母ザルのいる生まれた群を出て行くと言われているのですが、最近高崎山のサル社会で6才を過ぎても母ザルのもとを離れない若オスザルがでできました。オスザルが群れを離れるのは群内の血縁を回避するという重要な本能行動なのですが、高崎山のように社会環境が大都会になると、他の群れにメスザルを求めて移動しなくても恋愛ができるようになってきたからだと思われます。つまり群れの社会構成が大きくなったため家族数がふえ、そのため血縁のあるメスザル以外のメスザルが、たくさん群内にいるのです。（ニホンザルは檻の中の実験でも3親等内では交尾しません。）

このように一人前になっても母ザルの群れに残っているオスザルの特徴を調べてみると、母ザルが群れのメスザルの中で非常に強い地位にいるという家系的特徴がみられます。A群、C群においては共に群れの婦人会長（メスザル1位）の息子達にその傾向が出ています。この原因を考えてみると、母ザルの強い家系の子供は母ザルがいつもリーダー（ボス）と呼ばれる群れ経験の長い最上位のオスザルのそばに居るため、子供の頃から中心部の方で餌のおこぼれが食べられるという他の子ザルに比べると恵まれた経済環境に居ることが影響しているようです。

そして母ザルがリーダーの庇護のもとに何かと顔を利かせるため、子供同士の喧嘩においても大変優位になってくるわけです。このように母ザルの影響を受けながら青年期になって群れを移動したオスザル達でつくられている年功序列型のニホンザルのオス社会にルーズに入り込んでしまっているのです。

私達はこのような性的に一人前に成長しているのに、母ザルのいる群れを出ていかない若オスザルを新猿類と名付けています。7～8才で他の山から旅をして入って来た若オスザルに比べると、逞しさに欠け、かれらの社会のルールを良く理解していないようです。外廻りと呼ばれる群れの端で先輩ザルに気をを使う耐乏の生活経験がないせいか、餌が寄せ場に撒かれると、こそっと上司の側に行き横の餌に手を出して注意されているのをよく見かけます。自分より先輩ザルの近くに行っはいけないというオスザルのルールを、どうも他の群れの経験がないためわかっていないようです。そのせいか自分より若い子ザルが近くに来て、あまり叱ったりせず逆に気が向くと子ザルの毛づくろいを始めたりします。

ニホンザルの社会では、夫婦がないため母ザルの血縁だけしか子ザルにはわかりません。そのため育児はメスザルの専業なのですが、まるで私達のヤングパパみたいに、子ザルと戯れたりして今までのオスザルにあった威厳が感じられません。高崎山のニホンザルもかれらの社会環境の変化につれて、これからはいろんな新しい動きが起こってくるのが予想されます。